

A-1 最終報告書【10万円枠(2024年3月6日締切)／30万円枠(2025年3月6日締切)】

第14回ユネスコスクールSDGsアシストプロジェクト

助成金利用報告書 (申請年度：2022年度、実施年度：2023年度～)

学校名	特定非営利活動法人横浜シュタイナー学園
助成プロジェクト名	〈暗示型ホールスクールアプローチ〉見える化プロジェクト
主な教科領域等	教科領域 (教科横断)
キーワード ※複数回答可	環境学習、国際理解、平和・人権、世界遺産・地域遺産学習、防災・減災教育、気候変動、その他 (ホールスクールアプローチ)
助成活動に参加した生徒数	学年 人
その他の参加者数	地域住民・保護者 (9人) その他 (教職員約30人、他校教員等15名)
助成活動期間	2023年3月23日～2024年2月6日

※以下、文字制限はありませんので、具体的な活動の様子や成果が分かるように、記入してください。

■助成活動の目的・ねらい

学園の全教員がESDの理念を学び直した上で、学園が実践している「暗示型ホールスクールアプローチ」の言語による〈明示化〉を行い、その成果を紀要としてまとめ、さらに公開研修会により他校や地域に還元する。

■助成活動内容

- ・2023年3月23日：ユネスコスクールの目標や理念を学び直す研修を実施 (教員向け)
具体的な研修内容は別紙「ユネスコスクールとしての横浜シュタイナー学園 振り返りと展望」参照
- ・2023年一学期 (4月～7月)：毎週の教員会議で全4回の研修を重ねる
「ユネスコスクールとしての横浜シュタイナー学園」をテーマに
- ・2023年一学期後半 (6月～7月)：学園紀要にまとめるテーマと筆者の選定
- ・2023年夏休み：学園紀要記事「野ばら」の執筆 (担当教員8名)
- ・2023年2学期 (9月～10月)：保護者による学園紀要編「野ばら」集作業
- ・2023年2学期 (11月)：プロジェクト報告会の企画策定
- ・2023年年末 (12月)：ユネスコスクール関係者や学籍校に「野ばら」寄贈
あわせてプロジェクト報告会へのお誘い
- ・2024年2月3日：プロジェクト報告会開催 (参加者24名)

■成果①児童生徒にとって、具体的にどのような学び (変容) があり、どのような力を身につけたか。

この1年間を通じた全教員による取り組みを通じて、横浜シュタイナー学園がユネスコスクールであることの意義や、その自覚を通して他校や地域とのつながりをさらに強めていこうという、教員全体の意識の変容が大きかった。そのオープンマインドにつながる意識変容は教室内的な教員の姿勢を通じて、学園の児童生徒の開かれた姿勢として伝わっているように感じられる。

全員は無理だったが、学園紀要に8名の教員が、横浜シュタイナー学園の教育的サステナビリティ

ィーについての考察を執筆できたのも画期的だった。詳細は資料の項を参照のこと。

■成果②教師や保護者、地域、関係機関等に対するインパクト（例えば、発表会を通じて、保護者への啓発にもつながった等）

以下に、報告会に寄せられた感想を引用する。

- ・（地域関係者）本日は報告会に参加させていただき、ありがとうございました。学園のリズムを感じるとともに、学びとは何かをとっても考えさせられました。
- ・（保育園園長）先日は、貴重な報告会に参加させていただき、ありがとうございました。関係者の方が多く、はじめは、緊張感がありましたが、お話が始まり、先生方の伝えたい気持ちと楽しそうに語る様子が少しずつ緊張を和らげてくださいました。そのうち、ひきこまれ、ライゲン、手仕事、英語に興味を注がれ、日々の授業が対話的でとても毎日が楽しいのだろうと感じました。また、1番印象に残ったことは、小学校へ行っても、頭に働きかけない、ということでした。もっと小さな子どもたちに囲まれた環境にある私としては、とても考えさせられました。体験することで感じだことを自由に表現する子どもたちのと心とからだを大事に大事に育てていきたいと思います。参加して本当に良かったです。ありがとうございました。
- ・（かながわユネスコスクールネットワーク・メンバー）体験型の報告会、とても新鮮でした。保護者が多かったようですが、一般の方の参加も増やしたいですね。事前の広報の仕方など工夫して見ると良いかも。
- ・（UnivNetメンバー）久しぶりにああいう体験講座のようなことができて楽しかったです。改めて、こういうアプローチがWaldorfの魅力だと思ったし、こういうの（トンボだとか羊毛だとか1から10までの数え方だとか）を大学の授業やユースセミナーに参加する青年たちにもやらせてあげたいと思いました。
- ・（保護者）今回特に印象に残ったのは、ライゲンの体験でした。開催日の2月に合わせてか、冬がテーマの内容でした。みんなで教室の床を足でどンドンしながら、霜柱をふみしめていたり、そっと手で持ち上げて輝く氷を見つめ、そして耳を傾けて音を聞きました。そこに霜柱はないのに、自分が子どもの頃に霜柱で遊んだ冷たさ、その美しさ、手の上で溶けていく雫に心を向けたその感覚が戻ってきました。そしてなんといっても感動的だったのは、そっと霜柱に耳を傾けたら自分の心の内側が自然と静かになっていき、深くひとつ、深呼吸をして、先生のお話を自然と受け入れる体に自分が変わっていました。国語の授業でひらがなを習い始める前の子どもたちが聞くお話に耳を傾けたり、英語の授業の中ではパキスタン出身のリズワン先生のウルドゥ語を、わからないながらもジェスチャーや人形の動きに集中して、言葉を集中して聞き、繰り返し唱える体験をしました。手仕事の授業紹介では綿と羊毛を触りくらべ、それらが糸になり、衣服になっていく過程を感じながら子どもたちはこんな風に授業を吸収していくのかと、体感として学びました。先生のお話で「頭で学ぶ前に感じたり体で学ぶ」ということや、「ユネスコスクールといっても特別なことをするのではなく、日々のすべての営みの中にユネスコスクールの大切にしている要素が

入っている」など、とても印象に残るものがありました。

私の娘は5年生で学園に転入してから、毎日楽しそうに、そしてとても積極的に学びに向き合っているようです。今回の報告会の内容だけでなく音楽の授業も、オイリュトミーもすべての教科で感覚と感動をたくさん味わいながら学びを吸収する、豊かな学園生活を感じることができた一日となりました。

■自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

多忙な教員に、ユネスコスクール研修への動機をもってもらうのに、長い時間がかかりました。ユネスコスクール担当の教職員と保護者の長きにわたる地道な活動の積み上げが、ようやく教員会全体が自発的に研修に取り組んでみようという動機を引き出したと感じています。

以下、今回の助成で制作した学園紀要ユネスコスクール特集から教員の文章を引用いたします。

「これまで、わたしたちは『知りたい人はここへ来て、学んでください』というスタンスでいたように思う。これからは、もっと外向きに、誰にでも分かる言葉でシュタイナー教育を『説明する』努力をしていこうと思う。わたしたちがユネスコスクールの一員となった意味が十年の時を経て、少しだけ分かってきた。」

■今後の改善に向けた方策や展望

今回、残念だったのは、せっかく企画した報告会の参加者が振るわなかったことです。アシストプロジェクトの実施年度内に開催しなくては、という思いから、試験シーズンの2月に日程を設定してしまったこと、全国大会などの関連イベントも目白押しだったことなどが響いたと思います。報告会自体は大好評だったので、次年度以降にもあらためて開催を検討したいと話し合っています。

■参考資料

- ・ 教員研修の資料

https://www.unesco-school.mext.go.jp/schools/wp-content/uploads/2024/02/unesco_kensyu202303.pdf

- ・ プロジェクト成果物：学園紀要「野ばら」No.28 ユネスコスクール特集

2023年12月末に日本ユネスコ協会連盟事務所にお届けしました。

- ・ 報告会の写真とプログラム（ユネスコスクールの公式サイト内に掲示）

<https://www.unesco-school.mext.go.jp/schools/list/yokohama-steiner-school/#gaiyou2023>